清新二中だより

本校教育目標
１　豊かな心で、互いに敬愛できる人　（敬愛）
２　進んで学び、深く考える人　（知性）
３　健康で明るく、自ら鍛える人　（健康）
４　責任を重んじ、勤労を尊ぶ人　（責任）
５　礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

花 に 想 う

校長　白　石　　亨

「一人一鉢運動」という清新二中の伝統がある。

昨年度も１２月、生徒一人ひとりがビオラの苗を自分たちの手で白いワグネルポットの鉢に移植し、真冬の期間、当番を決めて水撒きを続けてくれた。そしてこの４月、育ててきたビオラは入学式の際、正門から昇降口までをつなぐ花道をつくり、優しい彩（いろど）りを添えて新入生を迎え入れた。花には、在校生一人ひとりの新入生を歓迎する優しさが込められていた。このように花には様々な思いが込められ、またその時々にいろいろな感情を人々に抱かせる。

そう、校舎内にも、いいなぁ‥と思う花がある。

それは本校の一輪挿（ざ）し。この４月、来賓トイレに一輪の花が飾られた。来校されるお客様や先生方のことを思い、主事さんが飾ってくれたものだった。殺風景になりがちな場所だからこそ、この気遣いが嬉しくなる。主事さん方の優しさと温かさが一輪の花に込められているように感じられた。

また自分ごとで恐縮だが、自分自身の初任校での忘れられない一輪挿しの花もある。

約４０年前、初めて勤めた中学校はとても荒れていた。当時は務め先の学校に限らず、昭和の終わりから平成にかけては全国的に中学校が激しく荒れていた大変な時代だった。当時は太いズボン、長いスカートをはく中学生の全盛期。来る日も来る日も生徒とぶつかりあっていた。毎日のように生活指導に追われていた。そんなある日、教室に向かうと教卓に花が飾られていた。一輪の野草だった。花瓶がわりの牛乳瓶にさされていた名も無い花（当時の給食は牛乳瓶）。実はクラスの数名の女子が、理科の授業での春先の野外観察の際、校庭から草花を摘んできてくれたものだった。女子生徒いわく「先生はいつも怖い顔をしている。だからお花を飾ったの･･･」と。この言葉にハッとさせられた。連日の生徒指導で気持ちが殺伐としていたのだ。その内面が無意識のうちに自分の顔に出ていたのだと思う。生徒への言葉遣いにもトゲがあったのだ。一輪挿しを前にして確かに派手な盛花も綺麗だけれども、校庭の片隅で摘んできてくれた一輪の名も無い花がとても美しく感じられた。そして静かな気持ちでありがたいと感じ入った。生徒への感謝の気持ちが自然に湧き出てきた。

現在、幸いなことに、清新二中には眉間（みけん）にしわを寄せ、眉毛を八の字にさせている先生はいない。

それは学校生活全般を通じて生徒諸君がとても素直に穏やかに過ごしてくれているからだ。学校のルールを守り、規律ある生活を意識してくれている。あたり前のことかも知れないが、このことが嬉しく、また尊く感じられる。家庭、地域、学校からの温かな愛情がたっぷりとそそがれ、認められ、励まされ、自分の力を発揮できる場があることで、生徒たちは伸びやかに真直ぐに育つことができるのだと思う。

新年度に入ってから、３年生が離任された教職員の方々にお別れの手紙を書いていた。担任の先生から手紙を見せてもらうと、ある女子生徒は「〇〇主事さんへ･･･学校の環境を整備してくださり、毎日とても大変な仕事をたった二人でやっているかと思うと、とても憧れる気持ちで胸がいっぱいになります･･･」と、去られた主事さんへの感謝の言葉が綴られていた。そう、主事さん方が丁寧に手入れをしてくれた校内のツツジが、今、満開の花を咲かせている。区花のツツジがみごとに咲いている。花はそれだけで美しい。

だが、人の優しさや温かな思いが込められた時こそ、花は一層輝きを増すのだと思っている。